

Skill-using を意識した英語授業

福嶋 秩子

English lessons emphasizing skill-using practices

Chitsuko Fukushima

1. はじめに

実践的な英語能力を伸長することを目的とする英語授業において、リバースの提唱した「技能の習得」(skill-getting)と「技能の使用」(skill-using)を区別する考え方は今なお一定の有効性を持っていると考える。この考え方によれば、言語活動は、skill-getting activity (言語に対する知識や基本的技能を得る活動)と skill-using activity (その知識や技能を実際の場面を使ってコミュニケーションをする活動)のどちらかに分類される。十分な「技能の習得」の活動を基礎に、橋渡しの擬似コミュニケーション活動を媒介としながら、「技能の使用」の実現として自然な「言語交流」(interaction)のできる状況を教室内に生み出すことで、コミュニケーション能力の育成をはかることができる¹⁾。これは「話し聞く」学習に関わる過程ばかりでなく、「書き読む」学習においても同様に機能する。本稿では、短期大学英文学科において「技能の使用」を意識的に実践した英語授業について報告する。

2. ストーリー・テリングの実践

20年来担当している「LL 演習」の授業において、当初からリスニングの技能だけでなく、スピーキングの技能も伸ばすことを目標としてきた。はじめは、リスニング・スピーキングの両方の練習を含む会話テープ教材を用いた。これらは当時まだ新しかった notional-functional

syllabus の考え方で構成されており、会話中心のリスニング・タスクはリアルでユーモアがあり面白いものであったが、スピーキングの実践において会話の型から離れにくいことを感じていた。

そのうち、レベル別に英語をコントロールしたビデオ教材がたくさん発売されるようになり、数種類を使ってみた (Longman や Oxford U.P. が発行したもの)。ビデオ教材の良さは、音声以外の表情やジェスチャーや背景などをすべてを見取ることができることで、テープ教材に比べて場面の状況がより詳しく理解できる。この利点を実感できた活動が、Oxford U.P. のビデオ教材 (*Grapevine*, *The Jericho Conspiracy*, *Only in America* など) が採用していた、各ユニットの最後におかれたストーリー・テリング (story-telling) のセクションであった。

ストーリー・テリングを実践してわかったのは、次のような特徴である。この言語活動は、会話を聞き取るだけでなく、動作や表情、感情、背景なども英語で表現する必要がある。そのため、会話表現に偏らず、広い範囲の語彙や表現の習得を必要とする。さらに、まとまりのある表現をする難しさもある。最初はひとりでやるのが難しいが、4人ほどのグループ活動、ペア活動を順に経るようにすることで、最終的にはソロでストーリーを語ることも可能となる。ペア活動のバリエーションとして、LL 教室 / CALL 教室のランダムペアを作る機能

を活用することで、同じ活動を違う相手と繰り返すこともできる。ランダムペアは会話にヘッドセットを利用することから、電話と同じく音声のみが頼りとなる。また、いつもと違う相手と話すことから、ゲーム的要素もあり、学生には好評である。このことから、最近では、テープ教材であれ、ビデオ教材であれ、post-listening、post-viewing の活動としてストーリー・テリングを活用するようにしている。

3年ほど前からは、英語教材として作成したビデオではなく、映画を教材化したテキストを使用している。テキストにストーリー・テリングの練習問題はついていないが、ユニットのまとめとしてストーリー・テリングを必ず課している。通常1週目で、新出語彙や熟語の導入、内容把握のためのビデオ視聴と各種の英語による質疑応答を行い(ここが skill-getting の段階)、2週目にストーリー・テリングを行っている(ここが skill-using の段階)。

2週目の前に多くの学生は予習としてストーリーを書いてくるが、活動時にはその紙をなるべく見ないよう指導している。4人のグループ活動でひとりずつ語っていくので、前の人の話をよく聞いてそれにあわせてうまく話をつないでいくことが要求される。学生たちは、別の授業で David Coulson 講師が指導している team talking² の技能を使ってお互いに助け合いながら話しているはずである。また、表現するにあたって、映画の中の会話で使われた表現を必ず使う必要はない。自分の知っている表現や易しい表現、一般的な表現を使えばよい。これはまさに「型を離れた活動」であり、skill-using ということになる。

自然な言語交流をもたらすには「意思疎通をしたいという動機」³が必要だが、ストーリー・テリングはそれを生み出すのかという疑問を持つ人もいられるかもしれない。しかし、よくできたビデオ教材、それ以上に映画は、圧倒的な量のインプットとストーリーの力で、学生たちの語りたという意欲をかきたててくれるのである。また、5-10分程度の長さのビデオを視聴して英語による質疑応答をやった段階では、実は学生たちの間でまだ内容理解の幅があり、グループ活動やペア活動としてのストーリー・テ

リングにおいてそのインフォメーション・ギャップが埋まるという実質的な理由もある。ただし、うっかりすると、この情報交換を日本語でやってしまうので、英語でなんとかやりこなすよう常に学生たちを激励する必要がある。

ストーリー・テリングの基本はユニットのストーリーを追うだけであるが、様々なバリエーションをつけることができる。登場人物のひとりになったつもりでひとり語りさせる「なりきりストーリー・テリング」、ある場面のあとで起こったと考えられる会話を創作させる「創作会話」、まとめとしてそれまでのストーリーもまじえて登場人物紹介をさせる「パーソナル・プロフィール」などである。これらのバリエーションも、学生のチャレンジ精神を刺激する。

ストーリー・テリングの成果は本来なら個別に面接をして確かめるべきものなのであろうが、受講者が多いので、期末の評価はペーパーで行っている。ストーリー・テリングとそのバリエーションがそのまま試験問題になるのだが、ほとんどの学生がかなりの量を書くことができる。ストーリー・テリングを行うことで、自発的なスピーキングが自発的なライティングに移行し、理解語彙が使用語彙に昇格している様子がみとれる。

なお、現在は、ストーリー・テリングのための予習などは必須としファイルに蓄積していくことを奨励しているものの、回収していない。portfolio方式でまとめさせたり⁴、お互いに公開して読み合うためにブログに書き込ませたり⁵することも考えられる。また、映画の背景や文化に関わる情報をソロやグループの課題として調査させ、それらを発表させたりすることも随時行っているが、このような課題を定期的にプロジェクトとして組み込むこともできよう。こうすることで、「話し聞く」だけでなく、「書き読む」力をさらに伸ばす学習が期待できる。

3. 実践の学生評価

映画教材を使ってストーリー・テリングを実践した平成17年度の通年講義の終盤(12月)に行った学生アンケート(自由記述、26名回収)によると、リスニング力が伸びた(15名)、変わらない(2名)、わからない(3名)、スピー

キング力が伸びた (17名)、変わらない (5名)、わからない (2名) であった。前項で述べたことを例証するものとして、ストーリー・テリングについての学生の声を中心に以下に分類して示す。

まず、ストーリー・テリングのおかげでスピーキングの力が伸びたと評価する学生の声である。

- 最初はとても難しかったが、慣れてくると以前よりも話すスピードが速くなったり話す量が増えているのがわかるので、充実感があつた。
- 実際に自分が耳で聞いたりテキストで学んだ表現を口に出すよいチャンスだと思った。これをする中で、日常会話が自分に入ってきたし、スピーキングの力も上がったと思う。最初の頃よりも耳で聞いた音をすぐにそのまま口に出せるようになってきたと思う。
- テリング・ストーリーは自分にとって非常に有益だった。私は状況をより詳しく描写するために smilingly など副詞をたくさん使うことを心がけた。よってたくさんの副詞を覚えるきっかけになった。スピーキング力が上がったかは自分であまり自覚はないが、去年の4月の自分だったら今やっているストーリー・テリングはできないと思う。
- ストーリー・テリングを通してスピーキングがよくなったのではと思う。他の人が使った違う表現を聞くこともできるし、何より、自分の中での理解が深まっていくのを実感した。1回目は4人で、2回目は2人というのもいいと思った。
- 簡単な言い方を探して口に出すのはすごくいい練習になったが、内容が難しくなったりもっと詳しく言いたいという時にはうまく表現が出てこないことが多い。でも、毎回少なくとも2回は練習できるので、いい練習になっている。
- スピーキングも以前よりはつかえないうまく映画の中に出てきた単語を使ったりして言えるようになったと思う。でも細かく話すことができなくて、自分の覚えてい

る部分に偏って話してしまっていた。

- ストーリー・テリングは誰と一緒にやるかわからなかったのも、それが逆に効果的だったと思う。言い換えなどを用いるために単語も多く学べた気がする。
- ストーリー・テリングは難しかったけれど、熟語など聞き取れなかった英文がちゃんと話せるようになった。本文で使われている難しい単語の代わりに自分で使える単語に代えて話せるようになった。
- ストーリー・テリングで、内容がわからなかったところも自分たちで教えあうことでわかるようになるし、英語を話す機会も増えるのでよいと思う。
- この授業は大変面白く自分の力も着実に伸びたと思う。スピーキングも自分の表現したい言葉を工夫をこらして何とか相手に伝えようと努力した。
- ストーリー・テリングのおかげで、英語で話すことに抵抗がなくなり自信があつた。

リスニングとスピーキングの力が相互に関連して伸びたという指摘もある。

- 初期に比べるとリスニング力は上がったと思う。ストーリー・テリングがあるせいで、いつもより必死で聞いていたからかなと思う。
- リスニング力がついてきたのと平行して、聞き取れるからしゃべることもできるというようにスピーキング力も前よりも上がったと思うし、ペアで練習することによって、自分とは違う表現を使って説明しているのを聞いて勉強になった。

改善すべき点として、スピーキングの後に、ライティングをして確認することや語彙の増強の必要性があつた。

- ストーリー・テリングで自分がしゃべったことが正しい文章なのかわからずじまいであったのは残念だった。最後にそれを紙に書き出したらよかったのかなと思った。
- ストーリー・テリングは難しく感じ、いつ

も言いたいことが言えなくてもどかしいと思っ
た。同じ単語ばかり使ってしまうので、
語彙力をあげたいと思った。

Pre-viewing の活動として単語や熟語を勉強
しておくことはリスニング・スピーキングの双
方に有効であった。

○この授業では映画を見る前に、いくつか文
法（福嶋注：新出の単語や熟語を使った表
現のことか）を勉強するので、なぜか暗示
がかかったように、映画の中でその文だけ
ははっきりと聞き取れるようになった。スト
ーリー・テリングも、スクリプトで話の流
れを見ながらでなく、自分の言葉で簡潔に
伝えられるようになった。

○ストーリー・テリングはすごく難しくても
初は大変だったけど、重要な単語や熟語を
おさえておくと少しはやりやすいと思っ
た。

3. リーディングの授業

LL 演習における聞き取った（見取った）内
容を話すという活動は、リーディングの授業に
おける読み取った内容を書くという活動に移し
変えることができる。リーディングはともすれ
ば、日本語による内容把握に終始しがちである
が、そのやり方では、せっかく読んだ英文が頭
に残らない。私のリーディングの授業では、英
文の内容理解は主に英問英答によるものとし、
わかりにくい文のみ必要があれば和訳すること
とし、段落ごとに要約をして全体の論理関係
を理解させている。そして、post-reading の課題
として、英文の要約を書かせている。

英文で要約をするメリットは次の二つであ
る。一つは、要約をするために、重要な文を探
し出し、論理関係を構築する練習になるという
ことである。二つ目は、英文を書くことで本文
中の単語や熟語などが身につくことと、まと
まりのある文を書く練習になるということであ
る。「意思疎通をしたいという動機」をもって
読者（audience）を意識して書くことを徹底さ
せ、書いたものを相互に読み合い感想を述べ合
うことができれば、言語交流が成立する。

4. ライティングの授業

ライティングの授業においても、前項の考え
方を実践することができる。高校までの英作文
の授業は、単文の和文英訳であることが多い。
短大入学直後の学生に聞いてみると、自分の書
きたいことを一つ以上のパラグラフで表現する
というタイプの英作文を経験したことのある学
生はかなり少ない。そこで、入学したての学生
の英作文の授業の目標は、まとまりのある内容
の英文を書くということにしている。

具体的には、自己紹介文から始まって、人物
紹介記事（パーソナルプロフィール）、近況報
告の手紙、フォーマルな依頼の手紙、ストー
リーの創作、映画評や観光パンフレットの製作、
英文履歴書の作成などを行う。大きなテーマを
与えて、必要な単語や熟語、書式、構成などを
示して練習したあとで、具体的に何を書くかは
自分で考えさせる（skill-getting）。読者を想定
してかきあげて、書いたものをお互いに交換
して読み、コメントを書く（skill-using）。この
peer feedback⁶が「意思疎通をしたいという動機」
を高めるために大きな意味をもつ。ほぼ毎週の
ライティング課題は常に peer reading の対象に
なる他、期末に完成提出することになっている
project writing の課題は、少なくとも一つのジ
ャナルについてそれぞれの学生がクラスメイト
全員分読むことを恒例にしている。

5. まとめ

skill-getting と skill-using という考え方により
教育実践をまとめてみたが、もちろんこれです
べて事足りるというものではない。佐野・米山・
松沢が書いているように、「リバーズのように、
skill-getting と skill-using を二分する立場」をと
らず、「fluency と accuracy の両方を高める統合
モデルが必要だ」という立場も理解できる。ど
のレベルの言語活動であっても、機械的な言語
操作でなく、できるだけ学生にとって意味のある
コミュニケーション言語運用をはかることに
いつも配慮したい。

（注）

¹ W.M. リバーズ / M.S. テンバリー 著 天満美
智子訳 1985 『英語教育実践ハンドブック』

上・下 桐原書店／オックスフォード 上
pp.4-5

- ² David Coulson 2003 “Collaborative Tasks for Cross-Cultural Communication” In: Corony Edwards & Jane Willis (eds.) *Teachers Exploring Tasks in English Language Teaching* Palgrave Macmillan
- ³ リバース他著 上 p.56
- ⁴ Alexandra Nunes 2004 “Portfolios in the EFL classroom: disclosing an informed practice” *ELT Journal* Volume 58/4 Oxford U.P.
- ⁵ Lara C. Ducate & Lara L. Lomicka 2005 “Exploring the Blogosphere: Use of Web Logs in the Foreign Language Classroom” *Foreign Language Annals* Vol. 38, No.3
- ⁶ Paul Rollinson 2005 “Using peer feedback in the ESL writing class” *ELT Journal* Volume 59/1 Oxford U.P.
- ⁷ 佐野正之・米山朝二・松沢伸二 1989『基礎能力をつける英語指導法——言語活動を中心に』大修館書店 P.156